

## 2016 年度 関西学院高等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。また、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の教員でもある先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」を導入しています。今年度は高等部内の自己評価に対して、教職教育研究センター教員、中学部部長、千里国際中等部・高等部校長、評価情報分析室室長からの第三者評価／学校関係者評価をいただきました。

関西学院独自の評価項目として「キリスト教主義教育の実践」を設定し、学校評価ガイドライン（文部科学省、平成 28 年改訂）で示された学校運営における 12 分野の項目の中から、「教育課程・学習指導」「教育環境整備」を選び、さらに高等部は重点的課題として、「人権教育」、昨年度より共学になったことに伴い、女子生徒への指導が始まったことを踏まえて「生徒指導」を設定して実施しました。また、2014 年度より文部科学省から採択を受けたスーパーグローバルハイスクール（SGH）に関連して「国際理解教育」を継続しました。

2016 年度の学校評価実施にあたっては、それぞれの評価項目について生徒・保護者・教員のご意見を伺うためにアンケート調査を行い、客観性を高める工夫をいたしました。今年度の回収率は、生徒 99.3%（前年度回収率 99.9%）保護者 74.1%（前年度回収率 59.9%）教員 100%（前年度回収率 100%）でした。

今年度も各項目を生徒・保護者・教員からのアンケート結果を参考に、現状の説明・評価・分析をいたしました。そこから見出せる高等部の課題を明らかにして、第三者評価者の評価を基にしながら今後の改善につなげていく所存でございます。

2017 年 3 月 10 日  
関西学院高等部  
部長 枝川 豊

## 学校評価

### 教育理念・使命・目標

高等部の教育目標は「イエス・キリストを通して、人と世界に仕える使命感と実力を養い、豊かな心と真摯な態度を備えた人格を培う」とする。礼拝、聖書科授業、宗教的行事を通しイエス・キリストから生き方を学び、又その学びの目的を他者に対して仕えるためであるという関西学院のモットー「Mastery for Service」を体現する世界市民の育成をめざす。一貫教育を柱とし、大学で学ぶ力を身につけ、多様な社会の要求に応えうる総合的な人間力を養う。

また、2014 年度より文部科学省に採択されたスーパーグローバルハイスクール（SGH）事業を軸に国際感覚を身につけた生徒を育成する。

### 2016 年度の評価項目

- キリスト教主義教育の実践：高等部の教育の根幹をなすため、毎年の評価項目として設定している。
- 教育課程・学習指導：重要項目であり、特にカリキュラムや科目の変更に応じるため、毎年の評価項目として設定している。
- 生徒指導：共学化に伴い、女子生徒への指導が新たに始まったため、この項目を一昨年度より設定している。
- 教育環境整備：共学化に伴い、生徒数増加、女子生徒の入学に対応するための設備を整備することが重要であるため、この項目を設定している。
- 人権教育：重要項目であり、経年変化をはかるため、毎年の評価項目としている。
- 国際理解教育：SGH事業が3年目を迎え、生徒の国際理解への姿勢をはかるため、この項目を一昨年度から継続して設定している。

### 2015 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 【テーマ】	キリスト教主義教育の実践 【キリスト教主義教育の理念の共有・実践】	自己評価	A
目標	建学の精神の体現		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>●例年、教員・保護者と生徒の間には、やや意識の差があった。（肯定的な回答の割合が教員・保護者は 80%台、生徒は 60%台）しかし、今年度、全教員から礼拝の重要性を繰り返し述べることにより、①「高等部の教育はキリスト教が土台になっている」70.2%（昨年 62.0%）、②「礼拝の時間は大切だと思う」72.1%（昨年 67.4%）、③「聖書の言葉には共感できる部分がある」72.7%（昨年 71.0%）という結果を得た。これらは、年間を通して私たちが「良い礼拝」を行いたいという思いが、生徒に反映されたからだと考えられる。</li> <li>●早朝祈祷会への参加も聖書の授業を中心に呼びかけることにより、自由参加であるが 150 名と昨年より大幅に増加した。また、宗教部員を中心とした宗教活動、有志参加で行われるバイブルキャンプも生徒の希望で本年 2 回行われ 11 月開催時には 32 名が互いに聖書を学んだ。このように、徐々に聖書を深く学びたいと求めている生徒も多くなってきている。</li> <li>●今年度の私たちの活動は生徒だけにとどまらず、生徒を通し保護者の方々へも影響を及ぼし、昨年同様、保護者の肯定的な回答は 82.5%（昨年 82.7%）と高い結果を得た。それは、保護者の集いの一つである「聖書を学ぶ会」の出席者数が、安定して多いことから理解できる。</li> </ul>		

	<ul style="list-style-type: none"> <li>●子ども会やボランティア委員会の活動も盛んになり、また、SGH認定校の主旨と相俟って「高等部は、キリスト教関連団体（教会・ボランティア）に関心を持っている」では、肯定的な回答が63.4%（昨年48.7%、一昨年50.5%）と関心が高くなってきている。</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>●今年度、キリスト教教育活動において、アンケートより生徒・保護者ともに成果が見られ、活動内容が適切であったと考えられる。来年度は、更にチャペルのあり方、キリスト教行事の工夫などの検討を行い、聖書科教員のみならず、全教員が互いに協力し合って取組んでいきたい。</li> <li>●宗教的な働きに特化した生徒の育成に、更に力を入れ、彼らを中心に、輪を広げていくことが重要であると考え。特に来年度からは2階席で200名弱の生徒がチャペルを守る。ハード・ソフト両面からの環境作りを丁寧に対応していきたい。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	教育課程・学習指導 【接続する大学が求める学力を保証する学習指導の実践】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●接続する大学で学ぶ力を保証し、社会の要求に応えうる総合的知識を習得する。具体的には1. 基礎学力の向上、2. 興味や関心に応じ深く学ぶ、3. 知の統合を目標として掲げる。</li> <li>●その中で学習に躓きのある生徒への補習などきめ細やかな対応をする。</li> <li>●教育課程や接続する大学への進路ガイダンスを適切に行う。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>●近年、英語・数学・国語の週課題や宿題等の質・量を充実させた取組を行っている。それが功を奏し、生徒質問7、8、9、10などの、主に生徒の学力がついているかという質問において、70～80%の肯定的な回答を生徒と保護者から得ることができた。特に、生徒質問8「授業内容を理解することができている」は79.7%で、昨年度比6.5%と増加した。このことより、基礎学力の定着に結び付いているという実感につながっていると思われる。学力向上のための取組について概ね、順調であると考えられる。</li> <li>●英語や数学が苦手な生徒対象に開講している特別授業や、英語、数学、国語に関して宿題が未提出の生徒、あるいは小テストにおいて基準点を満たさなかった生徒に対して放課後に行う居残課題という取組を数年続けている。その結果、生徒質問12「補習や課題は適切に行われている」は昨年度比77.8%で6.5%上がり比較的高い肯定的回答を昨年度から維持することができた。</li> <li>●今年度、昨年を反省を踏まえ、各学年に対し進路説明会を適切な時期に行った。その結果、教育課程の説明（進級・推薦・卒業）に関しては、生徒質問5、保護者質問2、教員質問10において、80～90%の肯定的な回答を得ることができた。</li> <li>●接続する関西学院大学に関する情報の提供に関する質問においても、生徒の80%、保護者の76.1%から肯定的回答を得た。今後、2018年度入試より関西学院大学の各学部へ推薦する最大数が変わる。生徒や保護者が望む情報提供を十分に必要がある。</li> </ul>		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>●学力向上をめざす取組を教科委員会を中心に、学校全体で進めて行く。</li> <li>●基礎学力の定着をより一層進めるため、英語・数学の特別授業・宿題指導の継続・強化を行う。</li> <li>●教育課程の説明（進級・推薦・卒業）については現在の取組を継続し発展に努める。現1、2年生の大学進学に関する十分な情報提供のあり方について、提供する情報の内容と時期について教務部で検討を行う。</li> </ul>		

評価項目 【テーマ】	生徒指導 【気持ち良く学校生活を送るための生活指導の徹底】	自己評価	B
目標	学校生活のルールを守り、規則正しい生活習慣を養う。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>●制服の着用ルールに関し、靴の着用について学友会、管理部の協力を得ながら、登校時に違反者のチェックをするなど数の把握にも努めた。女子の違反は見られないものの、男子には毎回 40 名前後の違反者が見られ今後さらなる対応が必要である。式典時の正装に際しては注意徹底が浸透しているように見られる。</li> <li>●今年度、共学校としてルールやマナーに対する指導を生徒指導部を中心に行ったが、生徒質問 16「守るべき高等部生活のルールやマナーが明確である」の回答に際し半数以上が肯定的な回答であるが、否定的な回答もあった。一方、教員と生徒のアンケート結果に僅かな差があった。この原因はルール解釈の曖昧さによるものと考えられ、来年度、生徒手帳、生徒ハンドブック等の文言訂正に着手する必要がある。</li> <li>●生徒質問 15～18 の結果に関し、ほぼ同比率であることから、学校生活全体への満足度に関連するものと予測できる。また、男女別結果に関しても同比率であることから男女平等に指導の対応がされているものと考えられる。</li> <li>●いじめ、また、校内での諸問題、トラブルに対し比較的早く対応しているという結果を得た。これは、多くの生徒が安心して学校生活を送れていると考えられる。来年度もこの値に甘んじることなく、より一層全ての生徒が安心して学校生活を送れるよう努力したい。</li> </ul>		
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>●制服の着用指導について、現状では比較的順調に改善されていることから、共学化完成年として、今後も継続して指導していく。合わせて校内風紀を順守する意識を育ませることが必要である。また、自転車通学も含め登下校中のマナーについてさらに指導を徹底し、加害者にも被害者にもならないマナーを身に付けさせていく必要もある。</li> <li>●学校生活におけるマナー向上についてもあらゆるキャンペーン活動をしていきたい。例えば、挨拶やスクールアワー中のスマートフォン不使用など、周知徹底していき、授業への取組む姿勢についても向上させたい。</li> <li>●毎年、学校として人権教育などを通じいじめを許さない姿勢を強く示し指導する。具体的にはホームルームでは担任が、また部活動においては顧問が生徒の言動や行動に対しより気を配り、生徒との信頼関係を構築し、様々な問題を早期に解決できるよう取組む。</li> <li>●家庭、学校において居場所に悩む生徒の居場所確保をするべく、カウンセリング委員会との情報共有を徹底し、まずは安心して学校生活を過ごせる環境を提供し、ホームルーム、学校行事、クラブ活動等に積極的に参加できる意欲を育む協力体制を築いていきたい。</li> </ul>		

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 【共学化に伴う学校設備の準備・改善】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>●男女共学、定員増に対応した施設・設備の充実を図る。</li> <li>●ICT、アクティブラーニングなどを活用した、新しい時代の教育に対応できる教育環境を整備する。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>●2010 年度からの高中部整備充実計画により、男女共学・定員増に対応した設備の整備を順次進めてきた。2014 年度高等部本館改築、2015 年度新体育館建設も終了し実際の運用も順調に進んでいる。更に 2016 年度は、昨年度の本調査で課</li> </ul>		

	<p>題としてあがったICT環境の整備を進めるべく、既存ICT3教室の機器リプレイス及び、高等部特別教室棟の一部にて無線LAN環境の整備を行った。更にもその無線LAN環境を用いて、今後の高等部全体のICT環境整備のため検証を進めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●今年度も生徒の意見を取り入れ全普通教室の傘立ての整備を行う等、適切な整備を行った。その結果、高等部の教育環境整備全般について、生徒(質問19～21)、保護者(質問12～13)、教員(質問28～32)ともに80%を超える高い肯定的評価を示している。概ね本校の施設・設備の整備が順調に進められていると判断して良いと考えられる。</li> <li>●昨年度課題であった本校ICT環境整備については、昨年度と同様、生徒の93.0%が肯定的な回答をしているのに対して(質問21)、若干の向上は見られるが、教員の42.9%はまだ否定的な回答をしている(質問33)。</li> </ul> <p>この課題に関し、今年度、将来のICT環境整備を見据えながら、組織的に取り組むための準備期間であったので、表面上の変化がなかったためこのような結果となった。今年度、情報メディア委員会に複数教科の教員から構成されるICTワーキンググループを設置し、無線LAN環境を用いた検証・検討を行った。その結果、高等部における将来的なICT環境整備の方向性について詳細な青写真が完成し、学院にも承認が得られ、それを全教員に示すことができた。来年度以降は、具体的な整備が大いに進むと考えている。</p>
<p>今後の方策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●来年度には共学化が完成することを受け、引き続き、現在の充実した施設・設備の良好な維持、管理を行うと共に、生徒の意見を尊重しながら更なる整備・充実を行う。</li> <li>●今年度に制定したICT整備計画を元に、来年度から着実にICT環境の整備を進めていく。具体的には、全館無線LAN化、全教室へのプロジェクター設置、そしてその先には教員・生徒が1人1台タブレット端末を持つ環境を想定している。同時に、ICTワーキンググループを中心に、その環境を利用したアクティブラーニング型授業、デジタル教材を用いた授業の指導法研究や教材開発、その他校務へのICT利用についても研究を行い、教員全体への研修等を積極的に行う。</li> </ul>

<p>評価項目 【テーマ】</p>	<p>人権教育 【人権尊重の精神と実践力の育成】</p>	<p>自己評価</p>	<p>B</p>
<p>目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●情報化やグローバル化の進展に伴い、多様化・複雑化する人権課題に対し、生徒たちが問題意識を共有できるようにする。マイノリティが大切にされる社会がなぜ必要なのかをよく理解し、人権尊重の文化を育てていくための主体的市民となることをめざす。</li> </ul>		
<p>具体的な取組の状況とその効果に対する評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●人権教育の柱を構成するものとして、学年礼拝の時間帯(10:20～10:45)に人権講座を実施している。1学期は1年生(テーマ:「身近な人権問題」①いじめについて②ネット社会と人権③「男女共生社会」がめざすもの)、2学期は3年生(テーマ:「人権を見る視点 ～『暴力』を中心に～」①戦争と人権②様々な人権問題)、3学期は2年生(テーマ:「力をかけ続けることの必要性 ～数十年の単位で人権問題を考える～」①障がい者差別②部落差別)と学期ごとに異なる学年を対象にして展開している。人権講座のシラバスを作成し、全教員、対象学年の全生徒に配布している。人権講座の内容を可視化することにより、関連教科やホームルーム活動との連携が取りやすくなるように工夫した。その結果、「いじめのアンケートや人権講座・情報科の授業・ホームルームでの取組等を通して、</li> </ul>		

	<p>高等部としていじめの問題を把握し、その防止に取り組んでいる」という質問において、否定的な回答が、昨年と比べて生徒（質問 23）は 41.7%から 35.1%に、保護者（質問 14）は 38.4%から 22.8%に、教員（質問 37）は 19.6%から 6.1%に減少した。しかし、教員の否定的な回答の少なさと比べると、生徒の否定的な回答は依然として多い。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 共学化に伴い、7クラスが9クラスとなった。視聴覚教室に学年全体の生徒を入れることが不可能となった。分割した人権講座では、外部講師に同じ講演を2回依頼することになり、依頼そのものも困難となる。また、アクティブラーニングの導入も要請されるようになった。人権教育推進委員会では、「今よりも生徒に届く人権教育を」と「双方向性」の二つをキーワードに人権講座の実施形態そのものの見直しに入った。ほぼ時を同じくして 2016 年度の学友会（生徒会）総会においても、「人権講座の見直しを要求する」という第3号議案が可決された。生徒が意見交換をできる場を設定してほしい等の要求がその中心であった。委員会で検討を重ね、2017 年度からは新たな形態の人権講座が展開される予定である。</li> <li>● 9月に全校生を対象に「いじめアンケート」を実施した。（2007 年度より継続）生徒間のみならず、ごく一部ではあるが、教師やコーチに対する記述もあった。それぞれの案件に関して、学年団を中心に誠実な対応ができた。いじめアンケートとしては、年に1回の実施であるが、常日頃から生徒たちが SOS を発信しやすい教員集団であることが大切である。教員の方には、案件を一人で抱え込むのではなく、チームとして対応してく姿勢が求められる。</li> </ul>
今後の方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2017 年度より、「今よりも生徒に届く人権教育を」と「双方向性」をキーワードにして、人権講座が大きくリニューアルされたものとなる。レクチャー、資料読みと感想文、クラス内での分かち合い、全体でのまとめのような形で、1週間くらいの期間に凝縮して展開する「人権ウィーク」（仮称）を設定する予定である。</li> <li>● 従来の「人権講座」に比べると、取り扱うテーマが限られたものとなる。そのため、知識・理解の部分をもどのようにして補うかが課題となると思われる。多様化・複雑化している人権課題にどのようにして取り組むかが問われる。</li> </ul>

評価項目 【テーマ】	国際理解教育 【国際的な問題への取組意欲・関心の向上】	自己評価	A
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>● S G H のプログラムとしての G G P（全生徒対象）や各教科を通して、世界共通の価値観や世界規模の課題に対応する姿勢を育み、また同時に異文化理解を深める。</li> <li>● 語学力や国際性を身につけるために、短期・中期・長期留学希望、海外渡航の意欲を育成し、国内外で開催される国際交流プログラムへの積極的な参加を促す。</li> </ul>		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 2014 年度に文部科学省からスーパーグローバル・ハイスクール（S G H）の指定を受け、G G P（General Global Program 全生徒対象）、G L P（Global Leader Program 選抜された生徒）と二層の教育プログラムを実施しており、今年度は5年間の S G H プログラムの折り返しにあたる3年目を迎え、各プログラムについて客観的に見直す時期であった。</li> <li>● G L P については1年生対象の G S I（Global Study I）と2年生対象の G S II（Global Study II）は、継続して世界を知り、グローバルな課題を解決・実践する力を身につけることを目標とし、週1回の放課後に1時間授業を行った。授業は大学教員を中心に高等部の教員が協力して行い、基本的に授業や生徒のプレゼンテーション等も英語で実施し、実践的な語学力を高める活動につなげることが</li> </ul>		

できた。ただG S I とG S II が座学中心となり、学校外の実践の場が不十分であるという生徒たちの不満の声が聞かれた。その不満も今年度初めて3年生の選択科目として開講されたG S III (Global Study III) の授業において、文化祭の中間成果発表会を中心に外部への発信を試みる機会が様々なかたちで与えられ解消されたといえる。

- GGPについての反省点として、採択1、2年目に全生徒に社会・国際問題についての関心・興味を高める機会を与えることを重要視するあまりに、多くの講演会を実施しすぎたことがあげられる。その結果、生徒たちが各講演の内容を十分に消化する余裕がなかったこともあり、2016年度のGGPは、全体講演会の開催数を少し控えめにし、学年として取り組めるプログラムの充実化を図った。1年生は、「世界のために自分たちができること」をテーマとして、各クラスでリサーチディスカッションする機会がホームルームで設けられ、全クラスでポスター発表をする予定である。
- 今年度のアンケートの生徒質問 25「国際的な問題や世界の出来事などに興味・関心が強くなってきたと感じる」については、昨年度は全体での肯定的評価は70.4%であったが、今年度は67.9%と割合がわずかながら下がっている。また同質問について男女別に比較した場合、高1、2、3年生の男子生徒では昨年度は69.9%が「感じる」と回答したが、今年度は66.1%とその割合が下がっている。一方で、1、2年生の女子生徒については昨年度(1年生のみ)で73.7%から70.5%と下がっているが、依然として肯定的に捉えており、女子生徒の国際問題への意識の高さがみられる。
- 過去3年間のSGHのプログラムへの取組が、徐々に評価され、教員の質問 39については、肯定的評価は95.9%、保護者については質問 16について「努力をしていると思う」が77.4%とその割合は高まっている。
- 昨年度と同様、生徒の受け止め方と教員の間に関きがみられ、教員や保護者側だけの満足ではなく、生徒側へもプログラムの意義についてもっと掘り下げて説明していかなくてはならない。
- 生徒質問 26「語学力を含み、国際性を身につけることができるプログラムが高等部で提供されている」については、昨年度は生徒全体で肯定的評価は74.2%であったが、本年度はその割合にわずかな伸びがみられ、77.7%であった。男女別では、男子生徒全体の回答でも肯定評価は昨年度74.6%から77.7%と伸びがみられ、女子生徒全体では、肯定評価は昨年度(1年生のみ)76.0%から今年度(1、2年生)76.3%と維持されている。このことから、SGHが学校全体に提供するプログラムのみならず、従来からの各種国際交流プログラムにも、生徒たちの関心が向けられるようになったと考えられる。
- 今年度、SGHプログラムの実施や、短期・中期・長期留学の説明会を開催し奨励するだけでなく、学校を通しての国際交流プログラムの紹介を積極的に行い、またそのようなプログラムに参加した生徒たちにその経験、成果を発表させる機会を学校内外で設けた。その結果、教員質問 40において93.9%と肯定的評価に伸びがみられ、保護者質問 17については、74.1%と高い肯定的評価が得られた。
- 生徒質問 27「将来、海外に行ったり、機会があれば留学したいと感じている」についての生徒全体の肯定的評価は昨年度の72.7%から66.6%に、男女別では、男子生徒全体では昨年度の70.8%から64.3%に、女子生徒全体では昨年度(1年生のみ)の81.6%から今年度(1、2年生)72.7%に大幅な低下がみられるが、これはテロなどの世界情勢の不安定さが大きく影響していることが原因とみられる。

	<p>●今年度も昨年同様、継続して海外渡航や留学の意義や国際交流プログラムの参加の安全性や意義を伝えるための説明会を積極的に告知して開催し、生徒や保護者に参加して理解してもらう機会を増やした。そのため、教員質問 41 については 93.9%に肯定的評価が大きく高まり、保護者質問 18 については 63.6%と高い評価が得られた。</p>
<p>今後の方策</p>	<p>●SGHのプログラムが学校全体で取り組んでいくべきプログラムであることを昨年度以上に全教員・生徒たちに認識させ、積極的な参加を促すとともに、同時に保護者からの関心や理解を得ていく。SGHプログラムがそのプログラムに携わる一部の教員のみによって運営されることなく、全教員の意思疎通と理解のもとで進められるものとなるようにする。そのためには来年度も今年度以上に、教科横断型で英語以外の教科によるセミナー等を積極的に開催し、SGHに関わっていない教員に国内・海外フィールドワークの引率を依頼していく。またSGH情報の発信と、全体の教師会や学年会での情報の共有が不可欠であり、生徒対象のみならず、教員対象の研修を通じて、学校全体として国際理解教育を積極的に推進していく。</p> <p>●昨年度と同様、留学団体の協力を得た短期・中期・長期留学について、各種国際交流プログラムについての説明会を、積極的に全生徒・保護者に告知して開催していく。国際交流部や英語科の教員のみならず、教科や分掌を問わず全教員が留学制度や国際交流プログラムについての情報を共有し、理解を深め、生徒の国内外で開催される国際交流プログラムへの参加、海外留学、海外渡航意欲を高めていく。</p> <p>●学校内での国際交流の一貫として、高等部で毎年受け入れている留学生と生徒同士の交流は意義があり、非常に重要な役割を果たしている。今後継続して受け入れをしていくためにも、学校全体としてその体制を教務的な面のみならず、教員全体の意識の面においても整えていく必要がある。また同時に、留学生の生活面を支えるホストファミリーの確保は不可欠であり、高等部の在校生の中で学校から近距離でホストファミリーとして貢献してもらえ家庭を確保する登録制度をさらに確立していく。</p>

(自己評価)

A+=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。



## 総合評価

キリスト教主義に依る教育における理解が生徒・保護者・教員ともに概ね共有できていると言えるが、ここが教育の根幹であるので、さらなる理解を深める努力が高等部として必要であると考えている。

教育に関しては、理解のために工夫がなされた魅力がある授業で、学習内容の定着を図ることを特に意識して教員は授業を行っており、生徒にも一定程度、そのような授業を受けていると感じていると解釈できる。さらに生徒の満足度を上げるためにも、今後ICTを用い、アクティブラーナーを育成する授業研究を深め、一層の授業の深化を図っていく環境整備が求められる。

これまで男女共学化を迎えるに当たって、校舎の改装や特別棟、専用体育館新設などのハード面と、女子生徒の指導や部活動等、また共学化に伴う定員増、クラス増、そして新学習指導要領導入によるカリキュラム改訂などの様々なソフト面の整備を行ってきた。1、2年生が共学となっているが、新しい風が高等部のこれまでの伝統の中に吹き込まれ、自然な形で共学化が進行し、共学化になった良い面が随所で見られる。

昨年度の部活動内での生徒指導上の問題への対応の反省から、今年度は特にできるだけ早い初動での的確な対応、また一人ひとりの生徒を尊重していく姿勢を意識してそれぞれの案件に、チームとしての体制を以って対処した。その成果が少しずつではあるが生徒・保護者・教員のアンケート結果に出ている。しかし、まだその体制は緒についたばかりであるので、来年度も引き続きその体制の強化に努めたい。

3年目となったSGH事業は、3年生が初めて1年次より関わってきた学年であり、3年間通してのプログラムが完成し、また文科省からの中間評価も受けた。運営組織の見直しも図り、教員へのさらなるSGHへの理解を深める研修も行った。生徒、教員共に国際理解(教育)への触れる機会、興味、関心は高まっていると言えるが、あと残された2年間での事業で、学校としてより高いレベルへと向かう改善を、できるだけ多くの教員の関わりで成し遂げ、実行し、関西学院のミッションステートメント、「Mastery for Serviceを体現する世界市民」の育成につなげたい。

## 2016年度の評価をふまえて2017年度に予定している評価項目、テーマ等

2017年度は、共学化完成の年度となるが、その検証のためにも評価項目としては、高等部の教育の土台となる「キリスト教主義教育の実践」はもちろんのこと、学習内容の中心となる「教育課程・学習指導」の項目、「生徒指導」「人権教育」も評価項目として設定する予定である。また、SGH事業も文部科学省の中間評価を受けて、改善を加えながら残り2年間を通じてのプログラムを構築していく中、「国際理解教育」の評価項目を継続する。

## 第三者評価/学校関係者評価

キリスト教主義教育に関して、肯定的解答のポイントが確実に増えているのは高等部としても礼拝をはじめ宗教行事を大事にしている表れであり、高く評価できます。関西学院の中で、高等部だけに限らず、すべての学校において大切な柱となる部分なので、生徒や保護者がそのことをしっかりと理解できていることは素晴らしいと感じます。

学力に関してもポイントが上がっているのは、学力向上委員会の成果が出ていると感じます。大学入試がない学校で、それでも学習の面で自信を持たせることが今後の進路に生かされるので、今後も日々の授業の工夫や補習を含めて、生徒たちの力を伸ばしてほしいと願います。

高校生の生活指導は、生徒を大人として扱いながらも、学校のルールを守って、関学生としての誇りを持たせる必要があると思います。高等部で大事にしておられる自治の豊かさを、これからも生徒たちが自覚して高めることができると良いと思われまます。

ICT機器の整備は、今後も積極的に進めていくことと思いますが、機器を使うのが当たり前となっているこの時代に、より分かりやすい授業への取組に、教員が同じ方向をこれからも向いて進められることが期待されます。この項目でも生徒たちの積極性が、高く評価できます。

人権の問題は、非常に難しいと思いますが、生徒たちや保護者の声をしっかりと聴く体制があるので、そこから大事な情報を集めながら、生徒たち一人ひとりに居場所のある学校づくりに、教員全員

が気持ちを併せて取組む姿勢で、これからも望むことが期待されます。能力のある高校生たちなので、きちんと理解でき、進んで行けるはずだと考えます。

国際理解に関しては、SGHプログラムを非常に高いレベルで実施しており、生徒たちにその取組の大切さが十分に伝わっていると感じます。関西学院らしい学び、世界と共に、世界の中でも難民の問題をはじめ、なかなか目が届かない部分に対しても、しっかり目を向けられる高校生たちを育てていただければと願います。高等部におけるSGHの取組は、この数年間にわたり、本当に高く評価できます。

時代を担う高校生たち、大学や社会に出ても、与えられた集団で中心として活躍してもらえらる力を、その学力と、誠実さという人間性を併せてバランスよく伸ばしていく教育を、これからも期待しています。

「キリスト教主義教育の実践」については、生徒の肯定的な評価はまだ高くなる余地がありますが、前年度よりも高くなっていることを高く評価します。生徒の評価がより高くなるように、全教員の協力により、一層の改善を続けられることを期待します。

「教育課程・学習指導」に関する生徒質問7、8、9、10については、肯定的な評価はまだ高くなる余地がありますが、質問8の肯定的な割合が高くなっていることは高く評価します。しかし、生徒の肯定的評価の割合がより高くなるように、学力向上のための取組を進めていただくことを期待します。生徒質問10、「関西学院大学に関する情報」については、1、2年生女子生徒の肯定的評価の割合が男子生徒のそれよりも低く、女子への情報提供に工夫していただくことを期待します。生徒質問6、「外部テスト」については、肯定的評価が最も低い一つであり、生徒自身の努力・学習に結びつくことが重要で、その点を生徒に認識してもらおう工夫を期待します。

「生徒指導」に関する生徒質問14「担任やクラブ顧問とのコミュニケーション」の肯定的評価は相対的に高くありません。この結果の要因やその分析をされることを期待します。生徒質問15、16、17、18についても、肯定的評価の割合は相対的に低く、生徒の安全・安心を考えると、特に、生徒質問17については、人権教育の観点からの方策を通じて改善されることを期待します。

「教育環境整備」については、教員質問33「ICT教育環境」を除き、教員、保護者、生徒の肯定的評価は、昨年に続き全般的に高い点は、大変評価できます。ICT教育環境については、生徒質問21「ICT機器」の肯定的評価は高いですが、引き続き改善されることを期待します。

「人権教育」に関する生徒質問22、23、24については、肯定的評価は相対的に低く、社会における多様な人々への思いやりを考えると、懸念されるところです。様々な改善のための取組を継続していただくことを期待します。

「国際理解教育」に関する生徒質問25、26、27の肯定的評価は必ずしも高くはありません。2017年1月26日に開催されたSGH事業の成果発表会で、第三者評価者が聴いた発表は全体の一部ではありますが、非常に素晴らしいものであり、成果発表を高く評価いたします。SGH事業を、高等部全体の国際理解教育に貢献するように利用していただくことを期待します。

最後に、アンケートについては、教員、保護者、生徒のアンケート項目数に大きな差があり、アンバランスに思えます。それぞれの項目でグループ間の比較がしやすい形にすることによって、分析しやすくなります。アンケート調査項目数のアンバランスの改善が期待されます。

高等部の先生方の熱心な努力により、キリスト教主義教育が一層浸透しているのは素晴らしいことです。昨年度は男子生徒の方が肯定的意見が弱い傾向が見られましたが、今年度は男子生徒と女子生徒の差異は見られません。また、全体的に学習や課外活動などについての生徒・保護者の満足度は高いことがまず評価できます。

SGH事業が3年目となり、すべての学年の生徒が1年次からSGHの取組に参加している形での初年度ということで、国際的な問題や世界の出来事などに興味や関心を持つ度合いや、国際性を身につけることができるプログラムが学校で提供されているかということに対しては、どの学年の生徒からも概ね高い肯定感が示されており、高等部でのSGH事業による国際理解教育発展への大きな成果

と言えます。SGH事業のさらなる発展に期するものとして示唆されることとして、中学部との連携（教員のみへの問いですが肯定感は高くない）やICT環境の整備ということが挙げられるのではないのでしょうか。

上でも述べたICT環境については、現状への満足度は、生徒と比べ、教員の結果が目立って低いという点が興味深いです。これは、高等部の先生方が授業環境の改善を進めることを積極的に考えておられることを証明しているといえます。教員アンケートの質問15～17からも先生方が質の高い授業をめざして熱心に取り組まれていることが表れています。質の高い授業、そして生徒の自立した学びを促す学習環境の向上に資するものとしてのICT環境の整備を早急に進められることを期待しています。

人権関連の取組に関しては、教員側の取組への意欲に比して生徒・保護者の回答は否定的なものが多いのは残念です。来年度にはすべての学年で共学となる環境で、キリスト教主義に基づいたうえで、多様に複雑化する社会の現状で世界市民としての人権教育を進められることを期待します。

共学化の完成に向けてキリスト教主義教育が生徒に浸透し、その実践が順調に進んでいます。今後は1年生の「聖書の言葉に共感できる」における肯定的評価の男女差からうかがえるように、男子生徒へのより効果的な働きかけが必要と思われます。

教育課程・学習指導および教育環境整備については、院内推薦制度を前提とした教育課程を整備する中で学力保証をめざした学習指導の充実がなされていること、さらにICT機器・環境の整備が進んでいる点が優れています。新学習指導要領の改訂に向けて、アクティブラーニング型授業への対応などさらなる進展が期待されます。

一方、接続する関西学院大学に関する情報提供の状況については、どの学年においても肯定的評価に男女差が生まれています。進路選択の多様化を踏まえ、特に女子生徒に対して個々人の興味・関心に応じた進路指導の充実が望まれます。

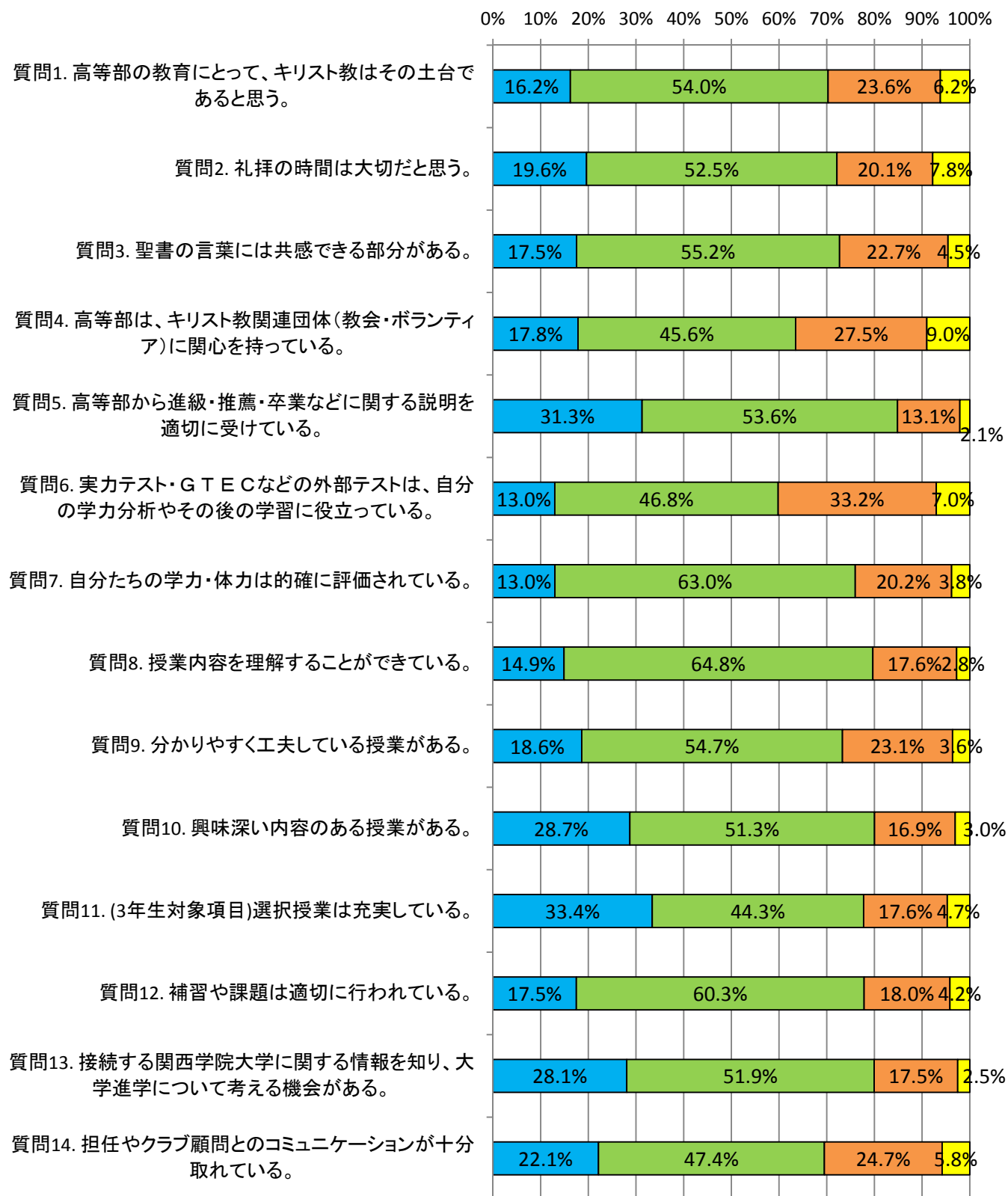
生徒指導に関しては、共学化の進展に即した様々な方法の導入と、制服の着方の指導など丁寧な指導の展開が評価できます。なお、ルールやマナーの明確さに関する肯定的意見について、教員と生徒の一定の差を解消するため、教員から生徒への適切かつ丁寧な説明が望まれます。また、問題行動への適切な対応についても教員と生徒の結果の間に明確な差が見られます。このため、いじめ問題を含めた人権教育を推進するとともに教員間の共通理解と協働を図り、一貫した指導方針の確立と指導体制の充実が求められます。

SGHの教育プログラムが3年目となり文部科学省からの中間評価を受ける中、成果発表会を行うなど積極的な取組がなされていることが評価できます。スーパーグローバル大学に指定されている関西学院大学との連携を強化し、プログラムを充実させることが期待されます。

2016年度の高等部の教育活動全体が、総合学園としての関西学院の一貫教育の推進と充実に貢献していることが大変評価できます。そして、ともに中等教育を担う中学部との情報交換・連携を一層強化することによって、より大きな推進力となっていくと思われます。

2016年度学校評価

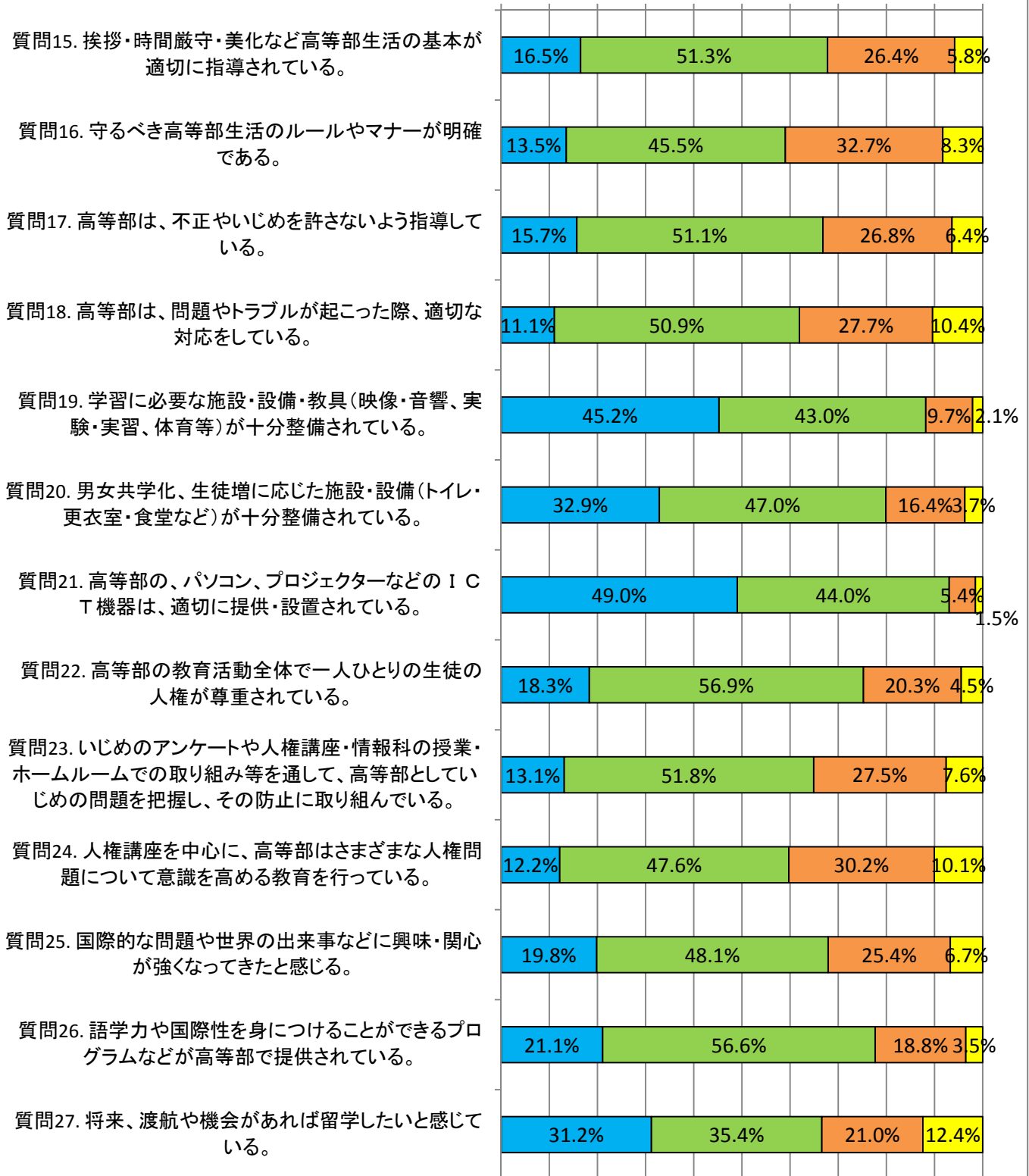
2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・生徒 質問1～14 (回収率 99.3% 1055人/1062人中)



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・生徒 質問15～27 (回収率 99.3% 1055人/1062人中)

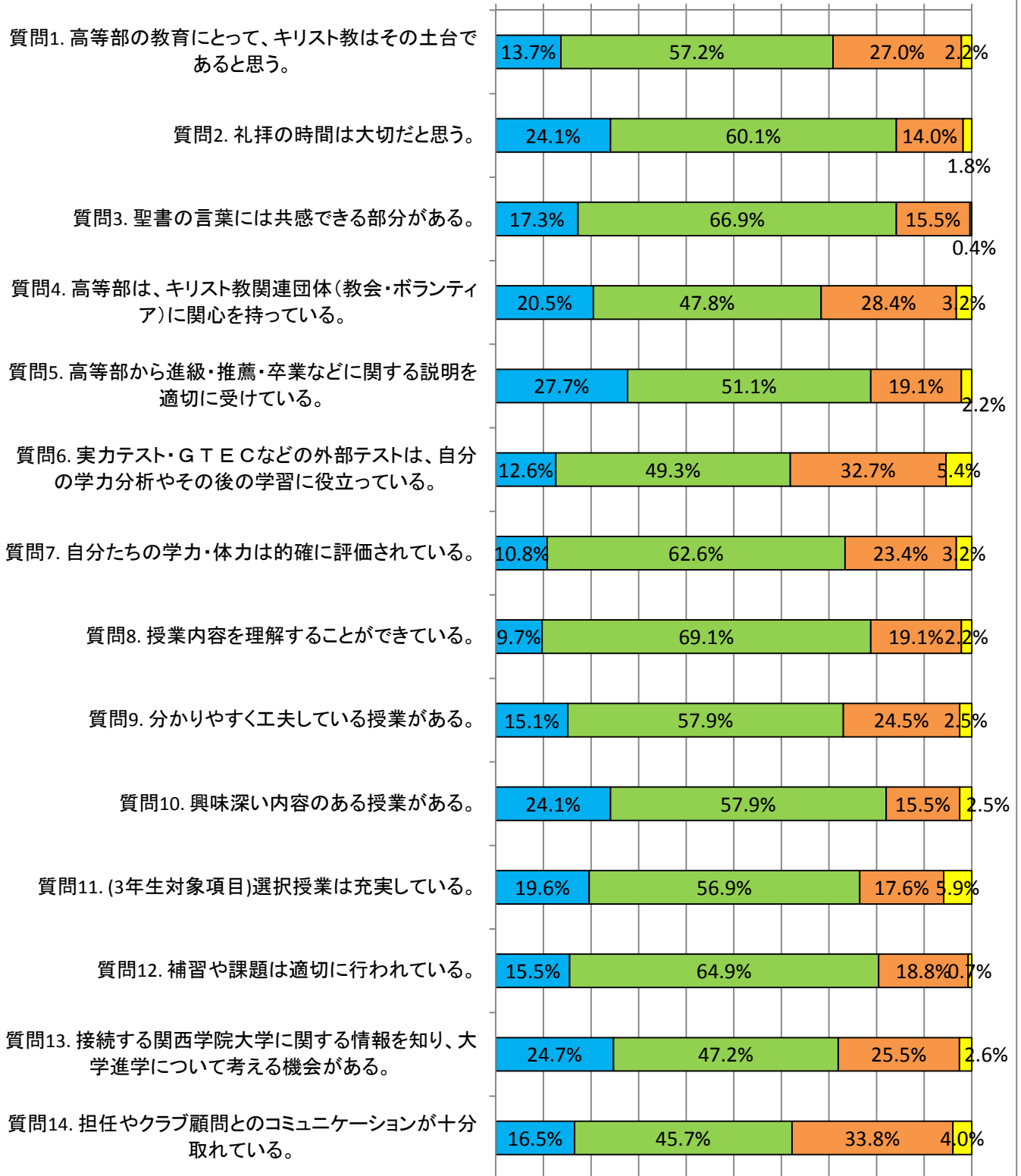
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったく思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1・2年女子生徒 質問1～14 (278人)

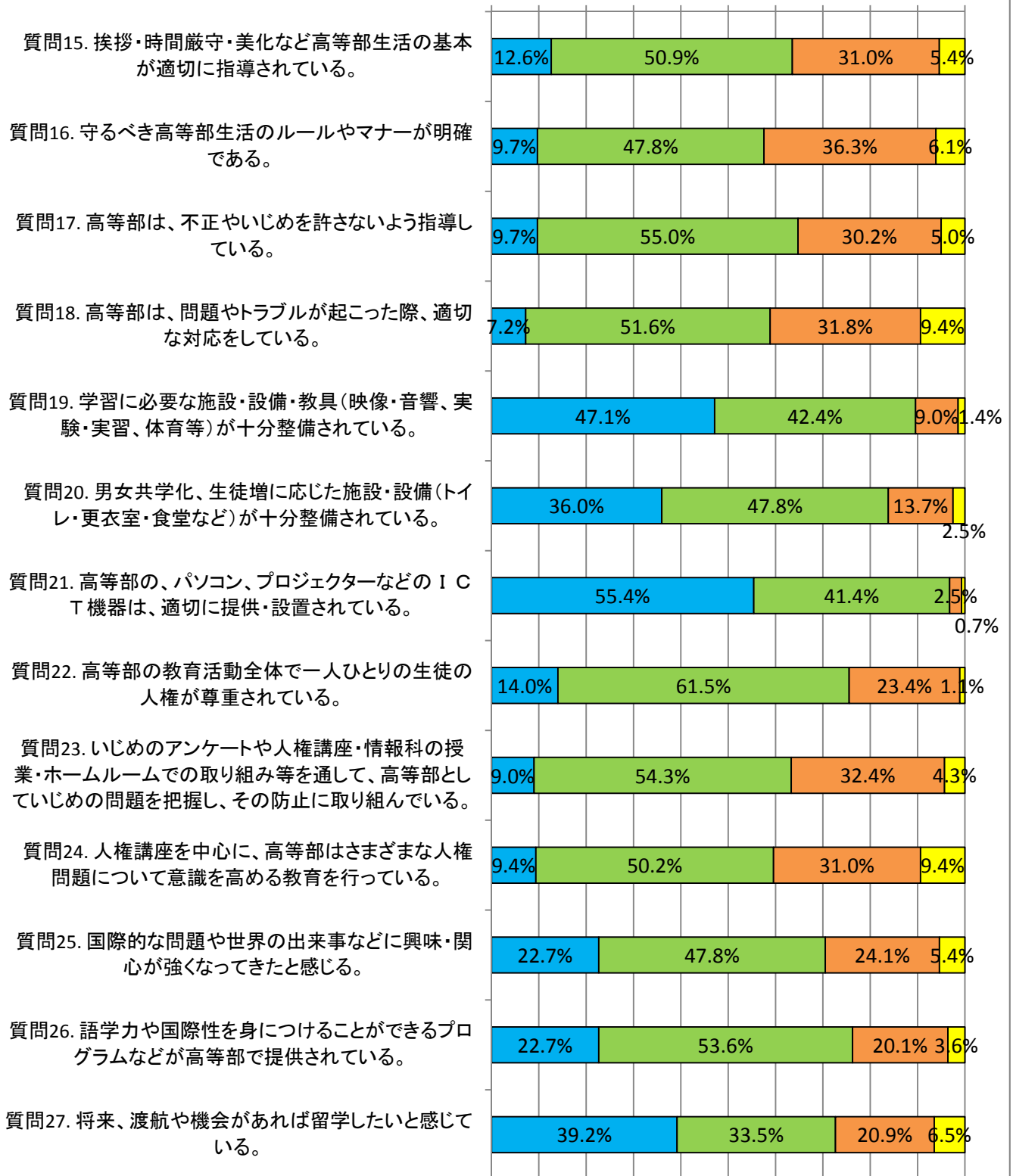
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1・2年女子生徒 質問15～27 (278人)

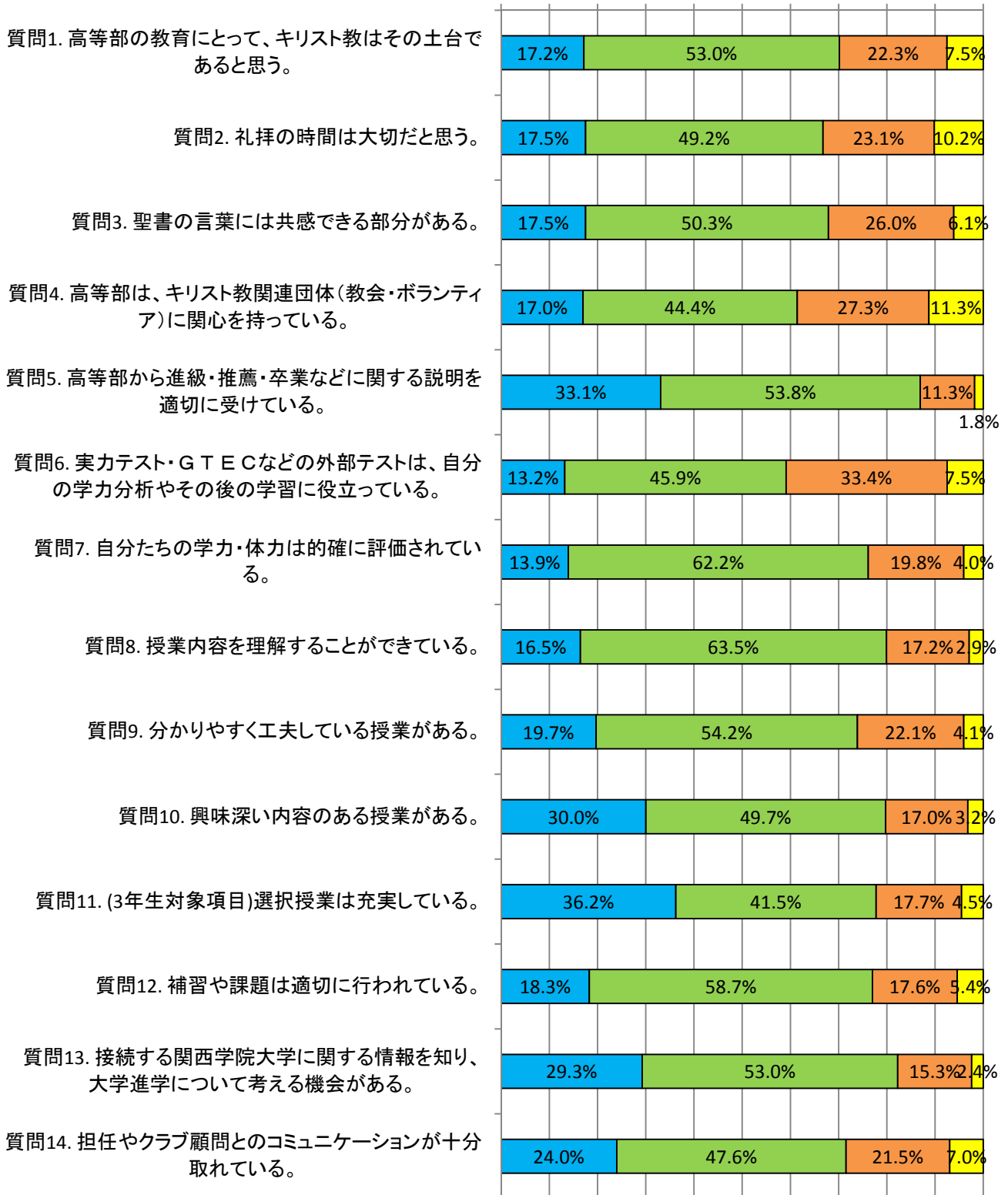
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1・2・3年生男子生徒 質問1～14 (720人)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

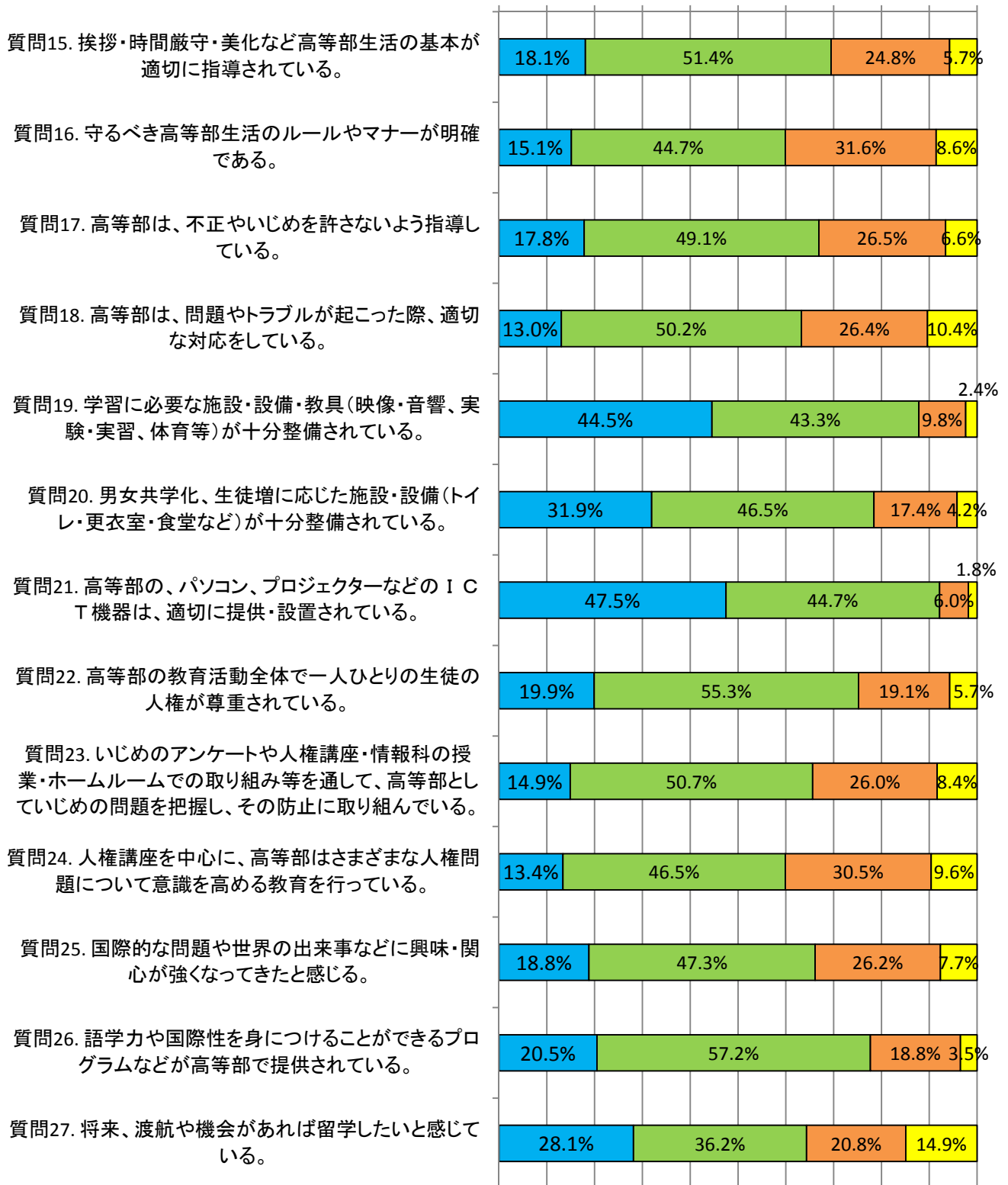


■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかと言えば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない



2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1・2・3年生男子生徒 質問15～27 (720人)

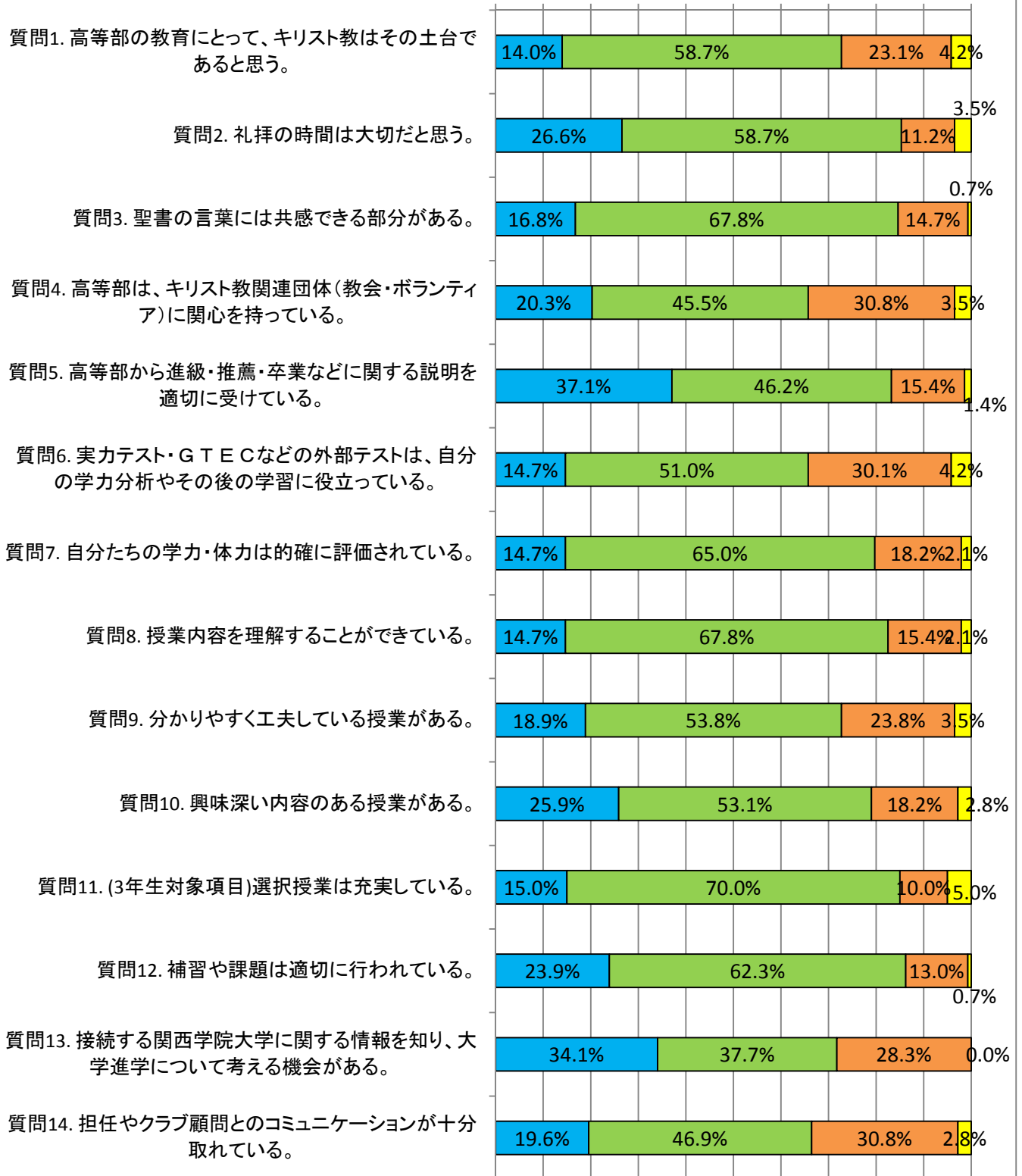
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかと言えば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1年女子生徒 質問1～14 (143人)

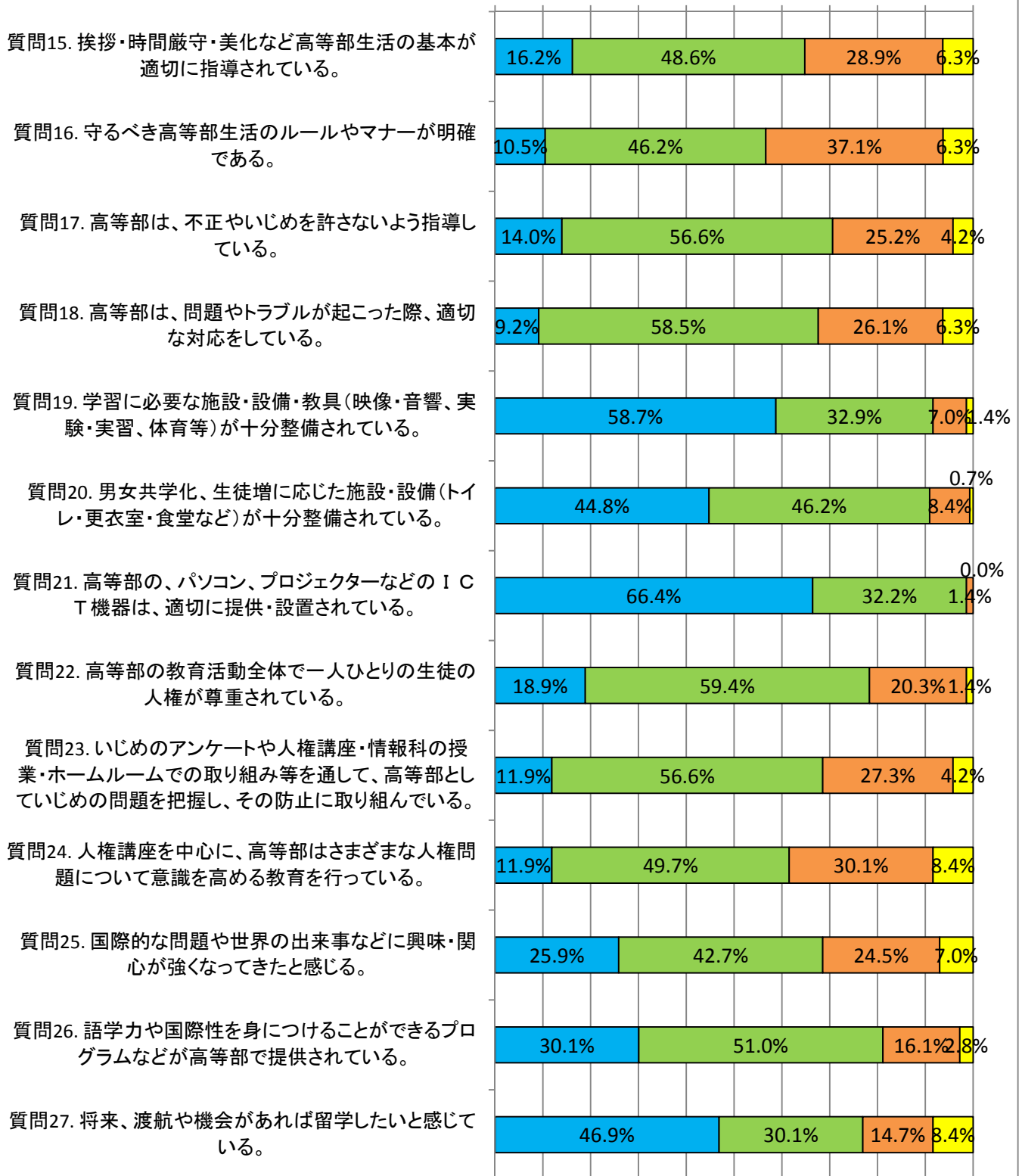
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1年女子生徒 質問15～27 (143人)

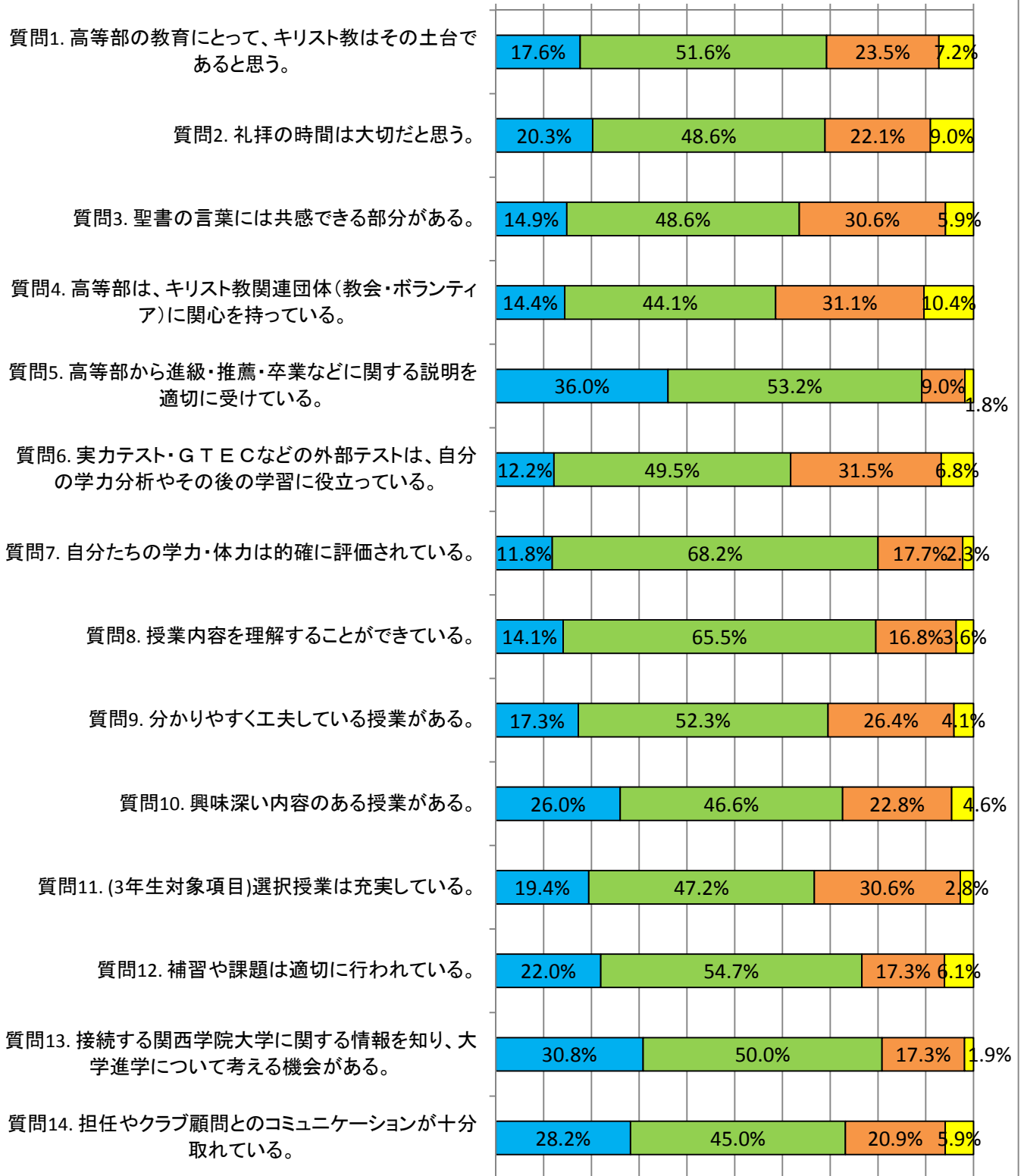
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1年男子生徒 質問1～14 (222人)

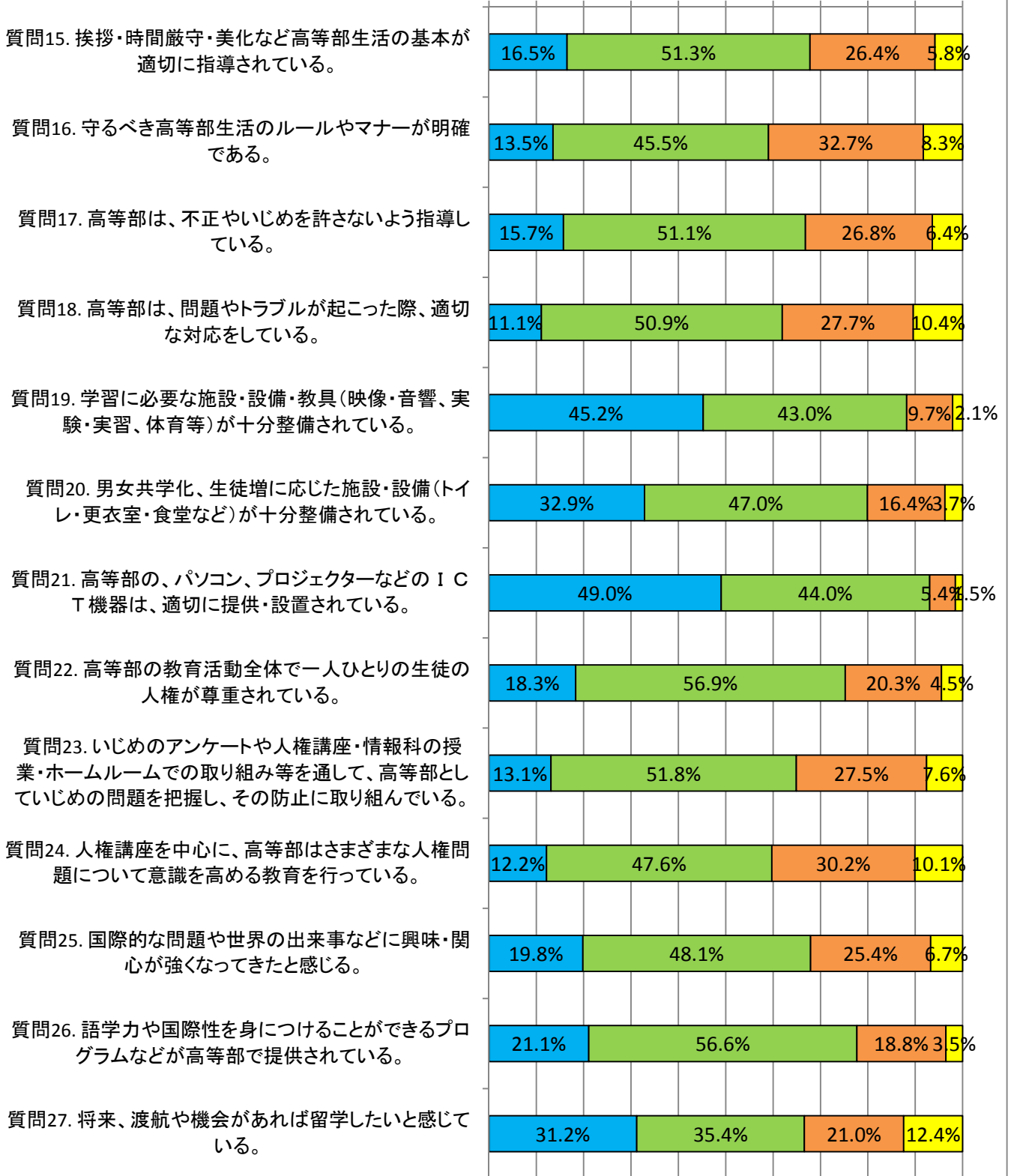
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・1年男子生徒 質問15～27 (222人)

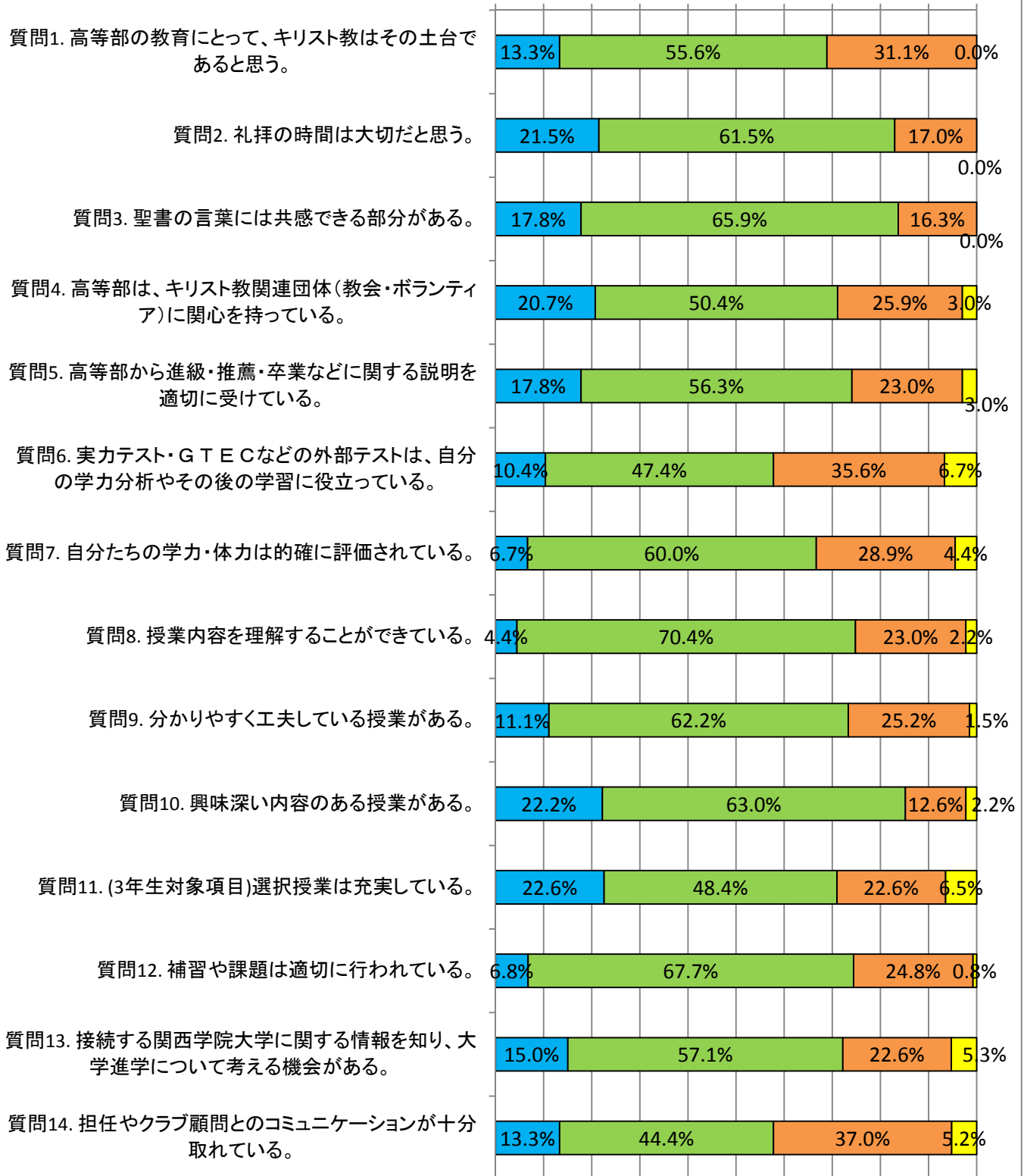
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・2年女子生徒 質問1～14 (135人)

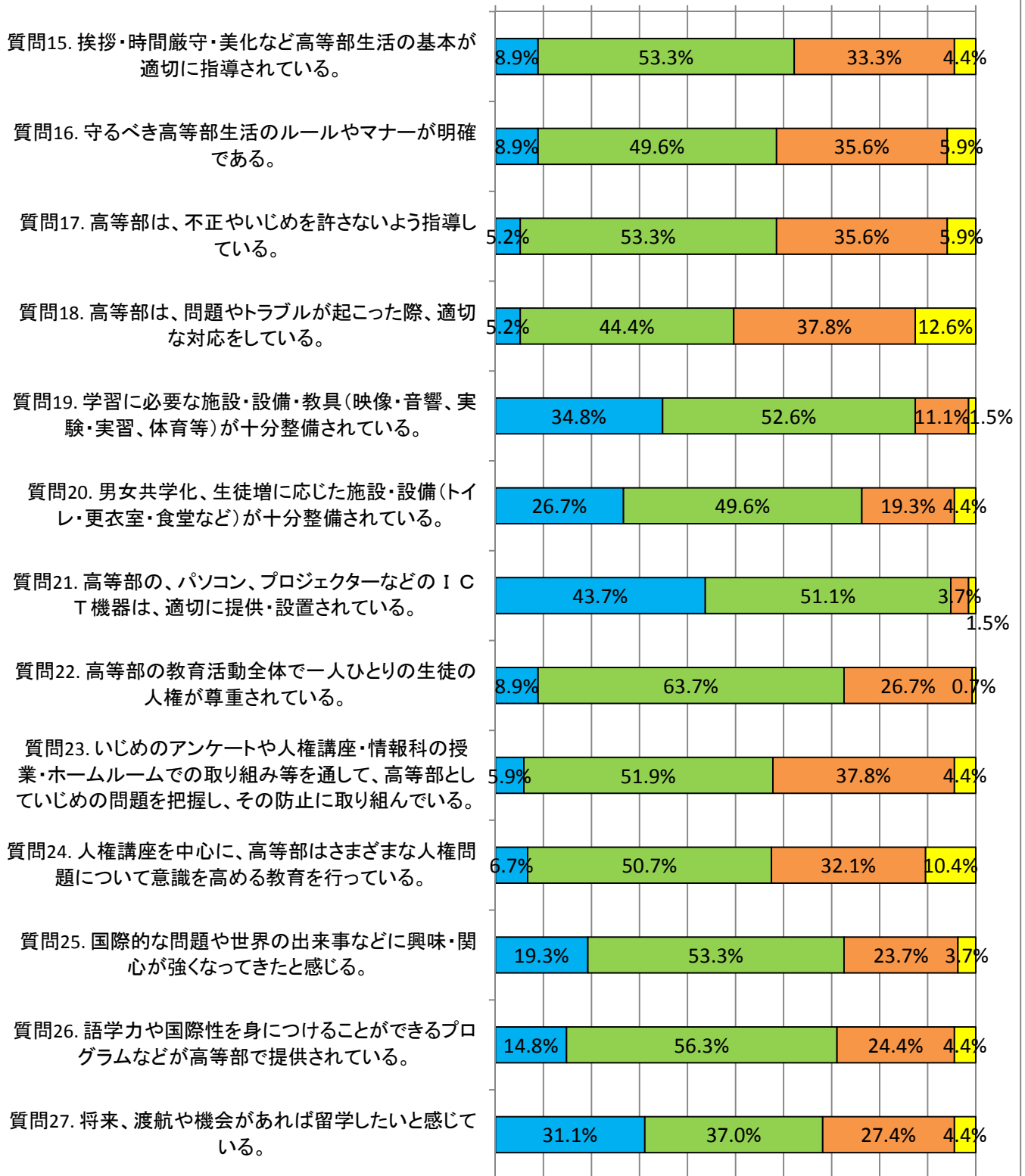
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・2年女子生徒 質問15～27 (135人)

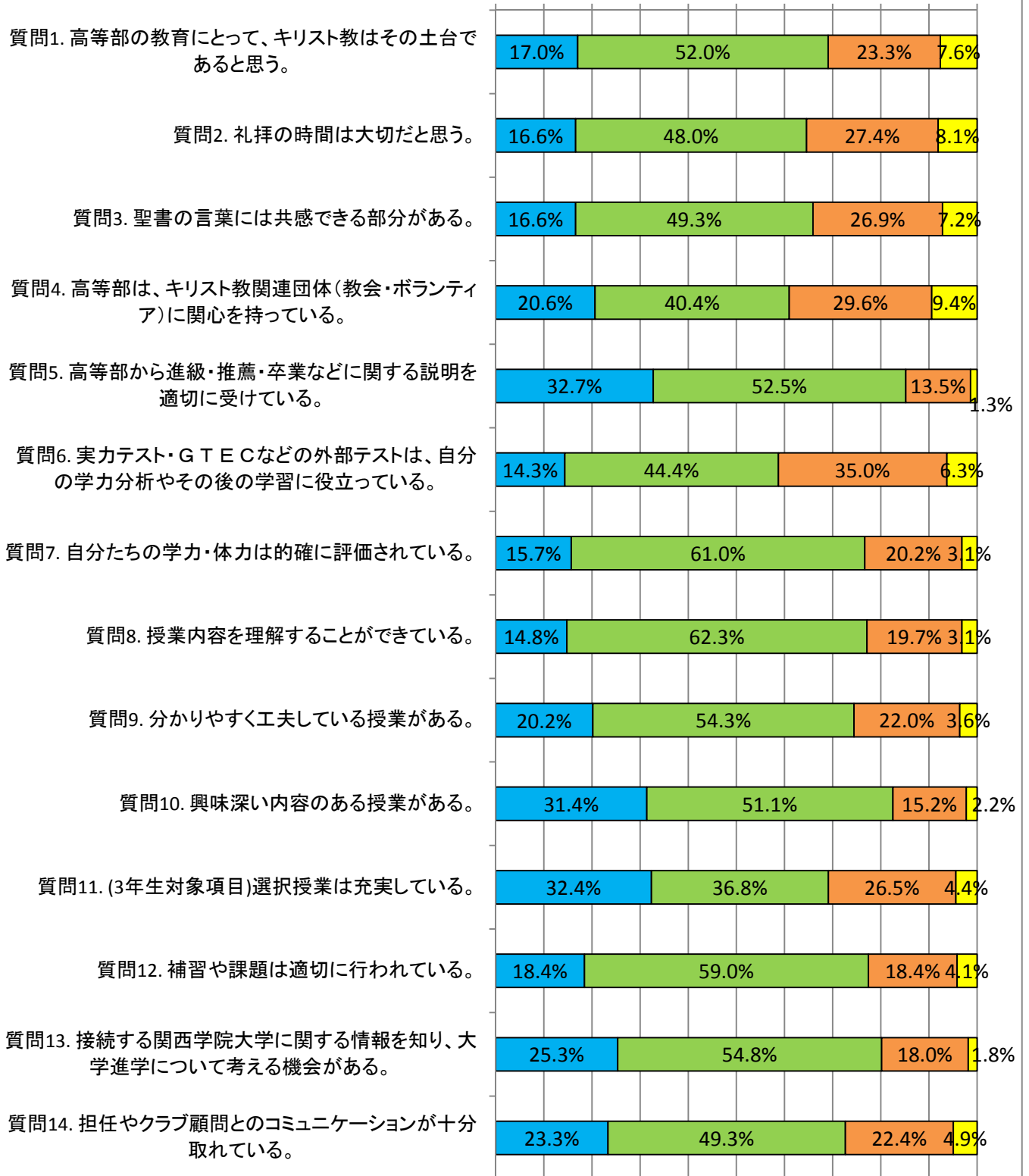
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・2年男子生徒 質問1～14 (223人)

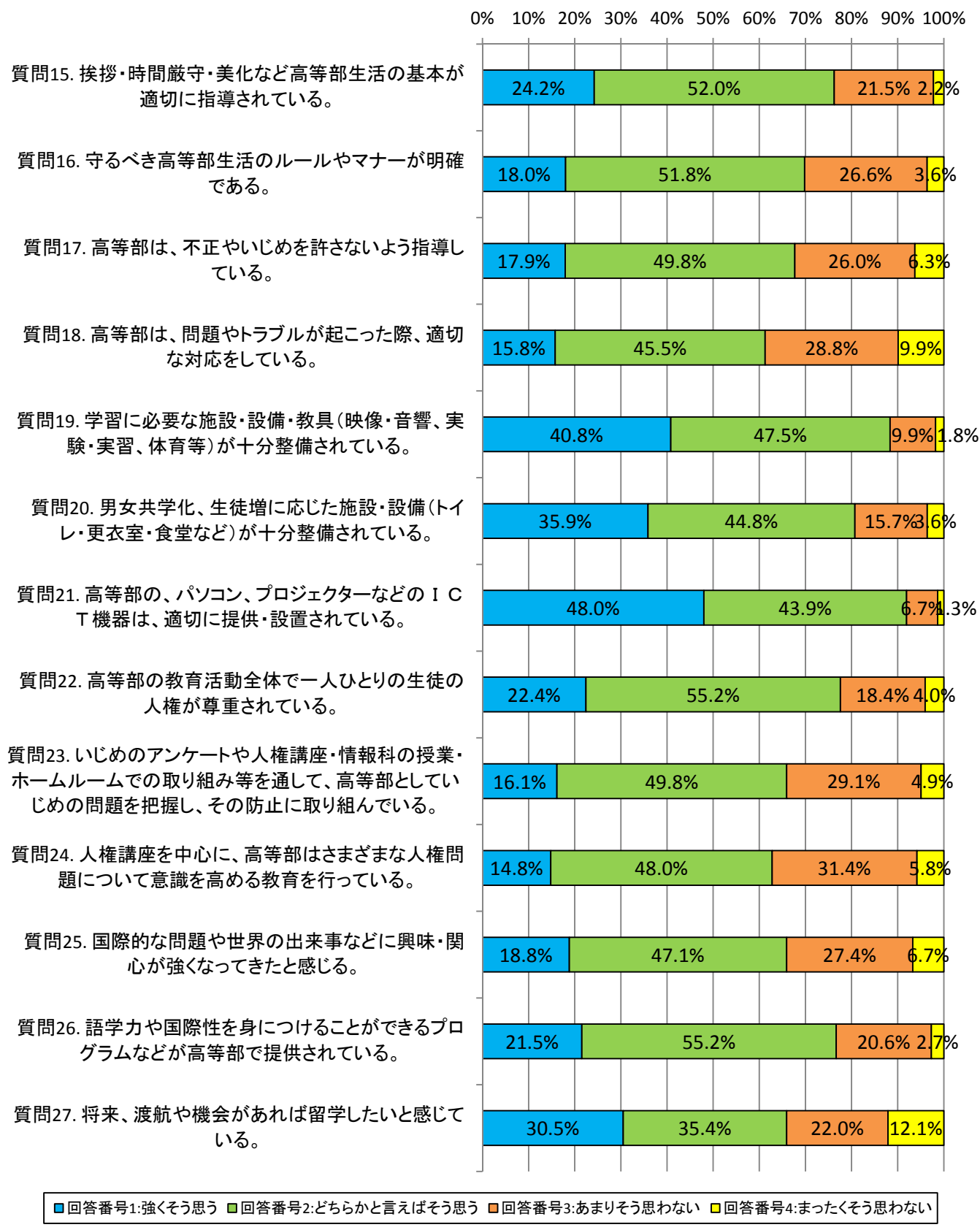
0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



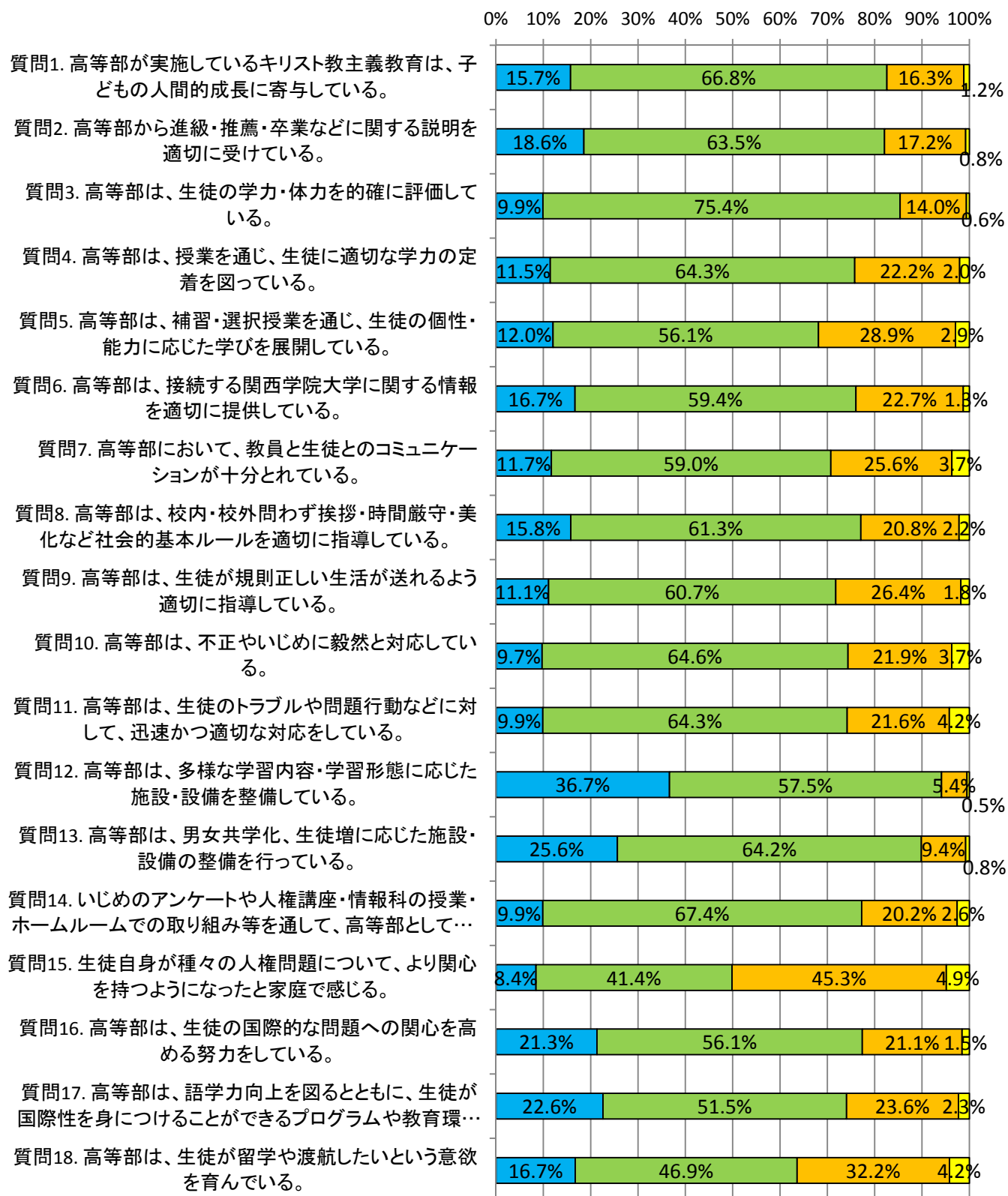
■ 回答番号1: 強くそう思う ■ 回答番号2: どちらかと言えばそう思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない



2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・2年男子生徒 質問15～27 (223人)



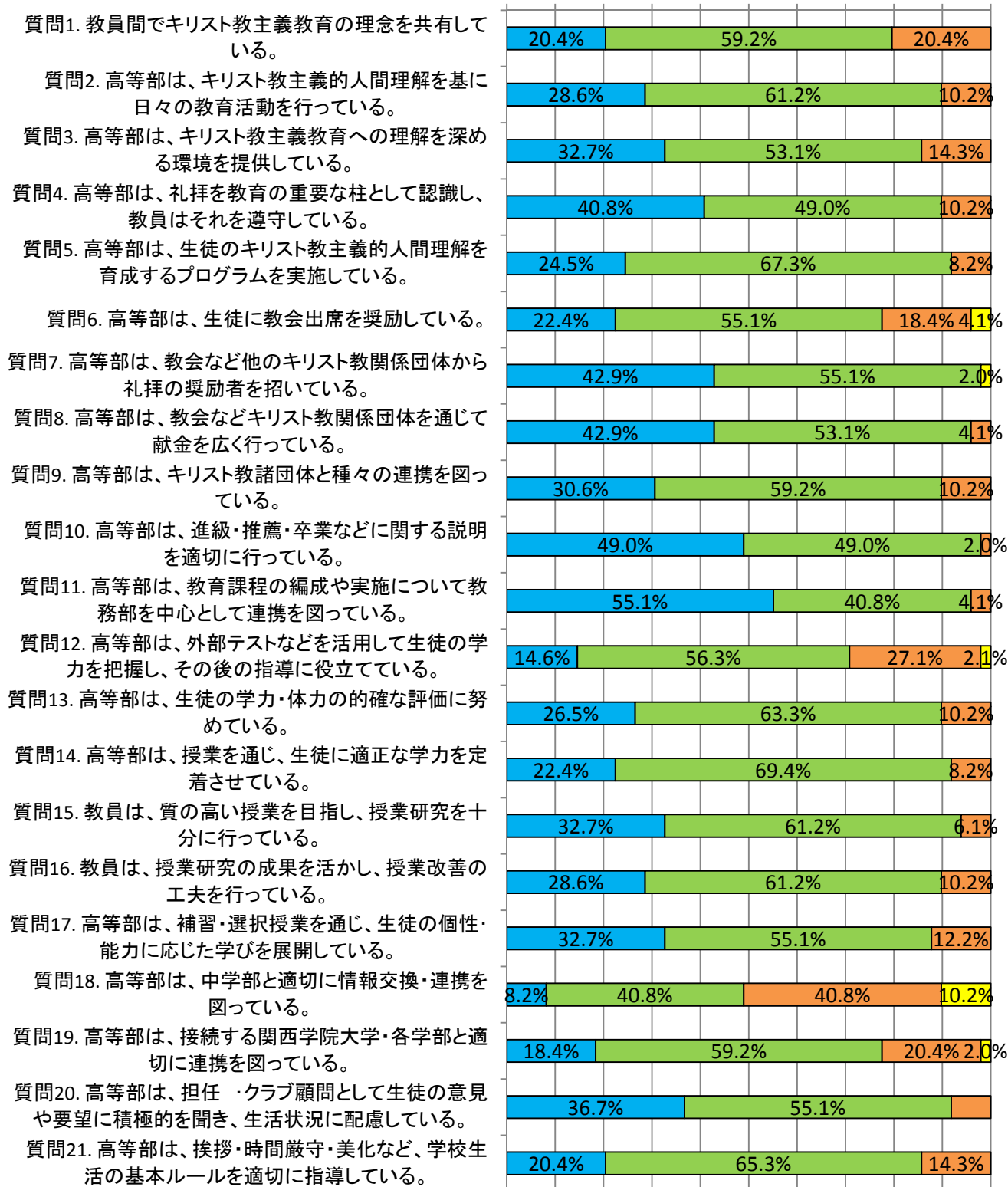
2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・保護者（回収率 74.1% 787人/1062人中）



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったく思わない

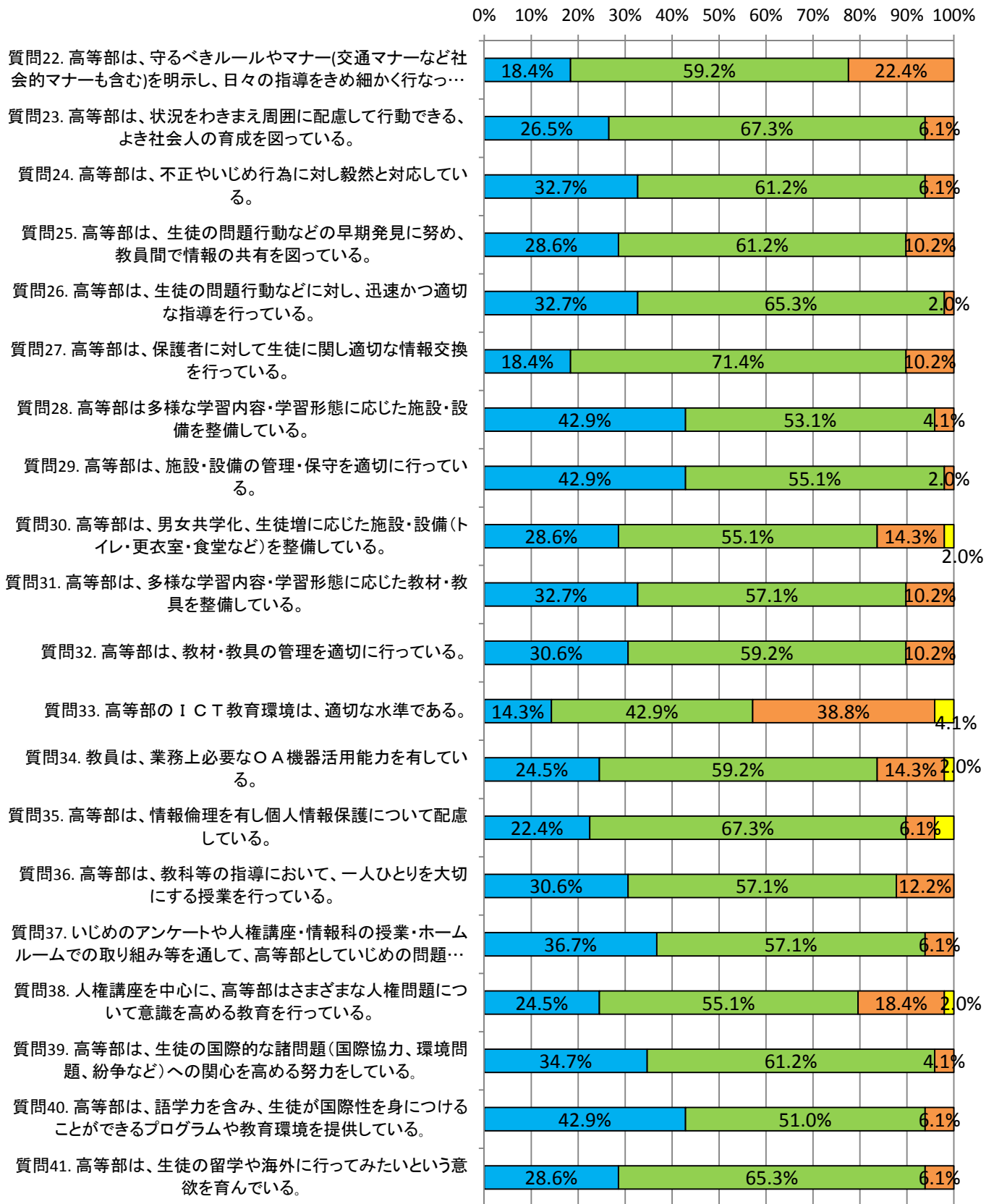
2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・教員 質問1～21 (回収率 100% 49人/49人中)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったくそう思わない

2016年度 学校評価アンケート集計結果  
 高等部・教員 質問22～41 (回収率 100% 49人/49人中)



■ 回答番号1: 強く思う ■ 回答番号2: どちらかといえば思う ■ 回答番号3: あまりそう思わない ■ 回答番号4: まったく思わない